

子宮頸がんに関して



西条市医師会会員
サカタ産婦人科
院長 坂田圭司

接する機会がありました。病名告知を受けた患者さんやその家族が口をそろえて訴えていたことは「毎年がん検診を受けていればこんなにならずに済んだのに。」という後悔の念でした。

震災後、A Cジャパンの仁科亜希子さんのCMを頻繁にご覧になった方も多いのではないのでしょうか？

◆子宮頸がんとは

子宮頸がんは子宮口あたりにできる病気で、病気が進行すると子宮や膣^{ちゅう}だけでなく、膀胱^{ぼうそう}、膀胱と腎臓をつなぐ尿管、そして直腸を破壊し、リンパ節や骨などに転移してゆく悪性の病気です。

治療は手術や抗がん剤、そして放射線療法などが行われますが、子宮がんが治癒しても直腸や膀胱のトラブルが起こったり、足が腫れたりして長い間悩まされ続けることがあります。

私は、かつて進行子宮頸がん

が子宮がんの検診・検査の対象でした。しかし、自治体によつてはここ数年で18歳まで引き下げるという傾向がみられます。これは子宮頸がんの原因が、性交渉によるHPV（ヒトパピローマウイルス）というウイルスの感染であることが明らかになったことにあります。性交渉の頻度の多い若い世代からの検診が有効であると認識されるようになったのです。

◆子宮がん検診

わが国の子宮がん検診の受診率は、欧米が約80%、韓国・台湾が約60%なのに対して、たった20%強程度と大変低くなっています。

最近の調査では、検診を受けない理由として「恥ずかしい」だけではなく「めんどうだ」というのが多いようです。

子宮がんにかかって、赤ちゃんのいた子宮を手術で摘出した向井亜紀さんは、記者会見で「20代からの検診をしてほしい」と涙ながらに訴えました。その姿は衝撃的といってもいいほど、説得力がありました。向井さんが伝えたかったことは、早期発見が子宮がんの治療で最も大切だということ。当時は30歳以上

が子宮がんの検診・検査の対象です。十分な予防効果を得るには、3回の接種が必要です。2回目、3回目の接種はそれぞれ初回接種後1カ月、6カ月で行います。

◆ワクチンの接種

現在の、HPVに対するワクチンが開発され、実用化されています。

性的活動の開始前に接種すると最も効果的で、10歳から14歳、次に15歳から26歳、その次に27歳から45歳の女性に推奨されます。

授乳中には接種できませんが、妊婦には接種しないこととなっています。ただし、ワクチン接種後に妊娠が判明した場合でも人工妊娠中絶の必要はないと思われま。それ以降のワクチン接種は分娩後に行うのがよいでしょう。

このワクチンは子宮頸がんの60%から70%の予防が期待

できます。残念ながらすべての子宮頸がんを予防することができないわけではないため、ワクチンを接種した女性も子宮がん検診を受ける必要があります。西条市では今年度、中学1年生から高校2年生に相当する女性に対して子宮頸がん予防ワクチンの接種を補助促進しています。

十分な予防効果を得るには、3回の接種が必要です。2回目、3回目の接種はそれぞれ初回接種後1カ月、6カ月で行います。

このワクチンは、かつて供給量の不足が起こり、接種時期によつては公的補助を受けられない事態も想定されますが、ワクチンの性質上3回の接種を推奨いたします。

他のワクチンとの接種間隔は、生ワクチン（麻疹^{ましん}、風疹^{ふうしん}、水痘^{すいとう}など）では接種後27日以上、他の不活化ワクチン（インフルエンザ、A型肝炎、B型肝炎など）では接種後6日以上の間隔をおいて接種します。

接種後は、失神、アナフィラキシーショックやけいれん等の有害事象が現れることが

あるので、接種施設で約30分の待機が必要です。子宮がんは、ほとんどの場合、初期には自覚症状がありません。不正出血や下腹部の痛みなどがあつた場合は、進行していることも少なくありません。決してめんどくさくならず、しかも恥ずかしがらずに進んで子宮がん検診を受けましょう。

◆将来の子宮がん検診

西条市は子宮がん検診に力を入れており、18歳以上の女性を対象に子宮がん検診を無料で行うことができるクーポン券が配布されています。

現在は集団検診車での検診のみですが、検診率の向上をめざして近い将来かかりつけの産婦人科での検診でもそのクーポン券が使える動きが出ているようです。

検診を受けて、
ワクチンを接種
しましょう！

